

希望表現「のぞむ」考

森 脇 茂 秀

一、はじめに

稿者は、森脇(2017)で「ねがふ」を考察し、次のような結論を得た。

中古和文の「ねがふ」「ねがひ」の意味用法を考察した。その結果、動詞「ねがふ」は、「自力では実現・成就がむずかしいため、他力を期待している、こうなつてほしいという考え」であり、助辞による希望表現の「詠嘆的希望表現」と極めて近似の性格を有していると捉えることができると考えられる。「ねがふ」が中古和文に出現する場合は、仏典との関連性がある場合が多いが、実現困難であることが仏典と結びついたのであろうと思われる。したがって、助辞による希望表現と意味的に重なる

面があり、中古和文に出現する必然性は低かったのではなかったかと考えられる。さらに動詞「ねがふ」は、「ねがはくは」のように、副詞句化する用法もあるが、このことは、希望表現形式に出現する、助辞「かし」の変遷過程と近似していると考えられる。

そこで、本稿においては、希望表現形式に用いられる「のぞむ」を取り上げ、「ねがふ」と比較しながら、その意味用法を明らかにしたい。

まず、宮島達夫他(2014)『日本古典対照分類語彙表』をもとに、「のぞむ」「のぞみ」の用例数を表にして示すと次のようになる(表1)。

表 I

	合計	徒然	平家	宇治	方丈	新古	大鏡	更級	紫	源氏	枕	蜻蛉	後撰	土左	古今	伊勢	竹取	万葉
のぞみ	23	5	11	1	2					3								1
のぞみののしる	1						1											
のぞみまうす	2		2															
のぞむ	22	3	3	2	1		2			9				2				
のぞむ	14	5	8							1								
いたはりのぞむ	1									1								
もののぞみ	1										1							

このように「のぞむ」「のぞみ」の用例数は、古典文学作品中あまり多くない。

ところで、現代語の「のぞむ」は、大きく分けて二つの用法がある。例えば「アルプスをのぞむ景勝の地」のような、①「遠くをながめる」視覚用法と、②「結婚を望んでいる」のような、「希望する」意を表す希望用法である。また、①の視覚用法については一般にテイル形がつくことは少ない。

『日本国語大辞典 第二版』の「のぞむ」「のぞみ」は、次のように指摘する。

のぞむ

【一】(他マ五(四))

(1) 遠くを見やる。ながめる。

(2) そうありたいと願う。こうしてほしいと思う。こい願う。期待する。ほしがる。希望する。所望する。「適切な対策が望まれる」

【二】〔他マ下二〕

比較して見る。関係させて見る。

のぞみ【望】(名)(動詞)のぞむ(望)「の連用形の名詞化」

(1) 遠く離れてながめやること。遠く見やること。ながめ。

眺望。

(2) そうしたい、そうありたいと願うことがら。希望。ねがひ。

*日葡辞書〔1603-04〕「Nozomiu (ノゾミヲ) タツスル。すなわち、トグル」

また、森田良幸 (1989) は、「のぞむ」の意味用法について次のように指摘している (傍線は筆者)。

地理的にその方面の遙か彼方までを見やる行為・状態にあること。遠くを見る行為が時間的な観念に変われば、その対象に対して将来のある姿や状態を心に思い描く行為となる。それが現状と異なるところから、その対象に将来そのようになっていくことを期待する心ともなる。

さらに、対象が特定の人や事物に限定されれば、その相手に対して、今はそうではないが、未来にある行為や状態をとることを申し出る積極的な依頼の言動ともなる。

(↓たのむ)

「望む」は「臨む」で、ある場面に直面すること。「試合に臨む」「戦争に臨む」「死に臨む」「困難に臨む」から、地理的な場面「試合場に臨む」「試験場に臨む」と、主体が場所を移動させる場合、さらに、固定した直面状態「湖に臨む高台」「海に臨む工業地帯」に至るまで、直面する行為→向き合う状態への発展が見られる。「望む」も、その対象の方向に向いているため、遠くにそれを見る、意で「臨む」と通じている。

森田 (1989) の指摘は、古代語を考察する上でも大いに有益であることは、ここで改めて述べる必要もないであろう。

以下、「のぞむ」の用例に則してコメントする。

2-1、万葉集中の「のぞむ」

『万葉集』には「のぞむ」の名詞形「のぞみ」が1例存するのみである。

(一) 彦星は 織女と 天地の 別れし時ゆ いなうしろ
川に向き立ち 思ふそら 安けなくに 嘆くそら 安け
なくに 青波に のぞみは絶えぬ(望者多要奴) 白雲に
涙は尽きぬ

(八) 秋雜歌 一五二〇)

この用例の「のぞむ」について、注釈書等の解釈は、①「遠くをながめる」視覚用法と、②「希望する」意を表す希望用法の両者がある。『日本国語大辞典 第二版』の「のぞみ」補注は、

(1) 遠く離れてながめやること。遠く見やること。ながめ。眺望。(の挙例の「万葉・八・一五二〇」については(2)「そうしたい、そうありたいと願うことがら。希望。ねがい。)

の意とする説もあるが、(2)は漢文の訓読から発生したともいわれ、「古事記」や「日本書紀」での「望」字の意味から(1)とする説が有力である。

とする。

沢瀉久孝(1967)は、『万葉集全釈』に指摘している『日本書紀』仁徳紀四年の「朕登高臺以遠望之」の記述等を基に、「次の「白雲に」もさへぎられる意が略されてあるので、これも眺望の意にとつてよい」(154頁)と指摘するが、従うべき説であると思われる。よってここでの意は、「青波に隔てられて眺望は絶えた。白雲に隔てられて涙は尽きた。」と考えられる。

2-2、土左日記中の「のぞむ」

『土左日記』には2例「のぞむ」の用例が存する。

(2) 廿七日。風吹き、波荒ければ、船いださず。これ

かれ、かしこく嘆く。男たちのこゝろなぐさめに、漢詩に、「日をのぞめば、みやことほし。」などいふなる言のさまを聞て、ある女のよめる歌、

日をだにも天雲ちかく見るものを

みやこへとおもふ道の逢けさ

(土左日記 46頁)

この用例は漢詩の引用句に「のぞむ」が表出しているが、引用された具体的な漢詩については未詳のようである。ここでの会話文の「日をのぞめば」は、後の和歌の、「日をだにも天雲ちかく見るものを」が対応しており、「日(太陽)を眺めると、都は遠い」と解釈できる。よって「のぞむ」の対象は「日」すなわち「地理的な地形」であり、ここでの「のぞむ」の意味は「見る」と同質の、「遠くを見やる。ながめる。」と捉えることができる。

(3)京に入りたちてうれし。家にいたりて、門に入るに、月明ければ、いとよく有様見ゆ。聞、しよりもまして、いふかひなくぞこぼれやぶれたる。家にあづけたりつる

人のこゝろも、荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみてあづかれるなり。

(土左日記 58頁)

この用例は、『土左日記』の最後の場面で、作者の心中を述べる場面である。「(家の管理を)先方が希望して預かったのだ」が、全く手入れしていないことを嘆く場面であるが、ここでの「のぞむ」は、「時間的に隔たった未来に、希望に合った状態の実現を望む」用法であり、「そうありたいと願う。こうしてほしいと思う。」意であると考えられる。

このように『土左日記』には、①「遠くをながめる」視覚用法と、②「希望する」意を表す希望用法の両者が出現している。

2-3、源氏物語の「のぞむ」

『源氏物語』には、9例「のぞむ」の用例が存する。

(4) (略) (近江の君)「あなかま。みな聞きてはべり。尚侍になるべかなり。宮仕にと急ぎ出で立ちはべりしことは、さやうの御かへりみもやとてこそ、なべての女房たちだに仕うまつらぬ事まで、おりたち仕うまつれ。御前のつらくおはしますなり」と恨みかくれば、みなほほ笑みて、「尚侍(ないしのかみ)あかば、なにがしこそのおぞまんと思ふを、非道にも思しかけるかな」などのたまふに、(略)

(行幸 三 313頁)

(5) まことや、かの内の大殿の御むすめの、尚侍のぞみし君も、さるものの癖なれば、色めかしうさまよふ心さへ添ひて、もてわづらひたまふ。

(真木柱 三 389頁)

(4) は「近江の君」の会話文に「のぞむ」が用いられたもので、「尚侍に空きがきたら私こそ希望しようと思つていたのに」と解釈できる。ここでは「尚侍をのぞむ」希望の意であるが、『日本古典文学全集』「頭注」に、「近江の君」の会話文に「非道」を用いたことに対して、

「漢語の場違いの使用が滑稽味を増す」と指摘するように、現実とは懸け離れた「今はそうではないが、未来にある行為や状態をとることを申し出る積極的な」希望表現である。

(5) は、近江の君が弘徽殿の御前で夕霧に懸想する場面の一節であり、「そういえば、あの内大臣殿の御娘の、尚侍を希望した女君も、そうした類の者のおきまりどおり、色っぽく浮かれた気持ちまでも加わつて殿にもこれには手をやいていらつしやる」と解釈できる。(4)と同じく、『日本古典文学全集』「頭注」は、「近江の君は、尚侍任官を望んで人々に嘲弄されていた。」と指摘しているが、ここでも「尚侍をのぞむ」希望の意であると解することができるとする。

(6) (略) (乳母) (略) ただ人だに、またかかづらひ思ふ人立ち並びたることは、人の飽かぬことにははべめるを、めざましきこともやはべらむ。御後見のぞみたまふ人々はあまたものしたまふめり。よく思しめし定めてこそよくはべらめ。(略)と聞こゆ。

(若菜上 四 25頁)

(7) 按察大納言は、我こそかかる目も見んと思ひしか、ねたのわざや、と思ひゐたまへり。この宮の御母女御をぞ、昔、心かけきこえたまへりけるを、参りたまひて後も、なほ思ひ離れぬさまに聞こえ通ひたまひて、はては宮をえたてまつらむの心つきたりければ、御後見のぞむ気色も漏らし申しけれど、聞こしめしだに伝へずなりにければ、いと心やましと思ひて、(略)

(宿木 五 470頁)

(6) は「乳母」の会話文に「のぞむ」が用いられたもので、「宮の御後見をお望みになられる人は大勢いらつしやるだろうと存じます」と解釈することができ。實際、乳母の発言の通り、後続する場面で、後に求婚者として、柏木、螢兵部卿宮、藤大納言などが登場するのであるが、ここでは「御後見をのぞむ」未来にある行為や状態をとることを申し出る積極的な「希望表現である」。(7) は、「(紅梅大納言は) しまいには(娘の) 姫君をいただきたいという気持になつたので、御後見を望むよ

しをそつと申しあげたのであつたけれども」と解釈することができ。ここでも(6)と同じく「御後見をのぞむ」で、未来にある行為や状態をとることを申し出る積極的な「希望表現である」。

(8) かくて二月の十余日に、朱雀院の姫宮、六条院へ渡りたまふ。この院にも、御心まうけ世の常ならず。若菜まゐりし西の放出に、御帳立てて、そなたの一二の対渡殿かけて、女房の局々まで、こまかにしつらひ磨かせたまへり。内裏に参りたまふ人の作法をまねびて、かの院よりも御調度など運ばる。渡りたまふ儀式いへばさらなり。御送りに、上達部などあまた参りたまふ。かの家司のぞみたまひし大納言も、やすからず思ひながらさぶらひたまふ。御車寄せたる所に、院渡りたまひて、おろしたてまつりたまふなども、例には違ひたる事どもなり。

(若菜上 四 55頁)

(9) (朱雀院) 「(略) また大納言の朝臣の、家司のぞむなる、さる方にもものまめやかなるべきことにはあなれど、さすがにいかにぞや。さやうにおしなべたる際は、なほ

めざましくなんあるべき。(略)と、よろづに思しわづらひたり。

(若菜上 四 29頁)

(8) は、女三の宮を光源氏が六条院に迎え入れる場面の一節で、「あの姫宮の家司をお望みになられた藤大納言も、おだやかならぬ心中ながらお供をなさる」と解釈することができる。ここでは「家司をのぞむ」、未来にある行為や状態をとることを申し出る積極的な希望表現であるが、勿論「御後見」は実現しない。

(9) は、朱雀院の心理文中の用例で、「大納言の朝臣が女三の宮との結婚を希望していることを婉曲に述べる場面であり、「また大納言の朝臣がこちらの家司になりた」と望んでいるようで、それ相応に忠実に仕えてくれるではあるが、しかしどんなものだろうか」と解釈することができる。『日本古典文学全集』「頭注」に、「なる」は伝聞。直接院に申し出ることを遠慮して、陰で女房たちにも、その意を漏らしていたのである。」とあるが、ここでも「家司をのぞむ」、未来にある行為や状態をと

ることを申し出る積極的な希望表現である。

このように「のぞむ」対象としては、「尚侍」「御後見」「家司」等の、「役職」や「社会的役割」であると考えられる。

(10) 二十三日を御としみの日にて、この院は、かく隙間なく集ひたまへる中に、わが御わたくしの殿と思す二条院にて、その御設けはせさせたまふ。御装束をはじめおほかたの事どももみなこなたにのみしたまふを、御方々も、さるべき事ども分けつつのぞみ仕うまつりたまふ。

(若菜上 四 86頁)

(11) (源氏)「あやしく、ひがしがしく、すずろに高き心ざしありと人も咎め、また我ながらも、さるまじきふるまひを仮にてもするかな、と思ひしことは、この君の生まれたまひし時に、契り深く思い知りしかと、目の前に見えぬあなたのは、おほつかなくこそ思ひわたりつれ、さらば、かかる頼みありて、あながちにはのぞみしなりけり。横さまにいみじき目を見、漂ひしも、こ

の人ひとりのためにこそありけれ。いかなる願(ぐわん)をか心に起こしけむ」とゆかしければ、心の中に拝みてとりたまひつ。

(若菜上 四 121頁)

(12) ただ、そのことを、このごろは思ししみたり。賭弓内宴など過ぐして心のどかなるに、司召などいひて人の心尽くすめる方は何とも思さねば、宇治へ忍びておはしまさんことをのみ思しめぐらす。この内記は、のぞむことありて、夜昼、いかで御心に入らむと思ふころ、例よりはなつかしう召し使ひて、(匂宮)「いと難きことなりとも、わが言はんことはたばかりてむや」などのたまふ。かしこまりてさぶらふ。

(浮舟 六 108頁)

(10) は、紫の上が、源氏の四十の賀のために薬師仏を供養する場面の一節で、「他の御方々(女君たち)もめいめいしかるべき(ふさわしい)ことを受け持つてすすんでご奉仕になられる。」と解することができる。ここでは「しかるべきこと(ふさわしい役割)にのぞむ」と

解することができる。

(11) は、光源氏の心理文中の用例で、「こうしたあてがあつて、無理にも自分を婿にと望んだのであつたか。」と解することができる。「日本古典文学全集」「頭注」は、「入道が強引に源氏と明石の君とを結婚させたのは、この瑞夢を頼りにしてのことであつたのかと合点された」と指摘している。後接する箇所「いつたい入道はどんな願を心に立てたのであらう」と、漢語「願(ぐわん)」があり、「のぞむ」と対になっているが、ここでは、「婿にとのぞむ」未来にある行為や状態をとることを申し出る積極的な希望表現である。

(12) は、匂宮が宇治行きを大内記に相談する場面の一節で、「この内記は心中に望むところがあつて」と解釈することができる。ここでの「のぞむ」の対象は明記されていないが、「除目の時分」であるという古注釈書もあり、他の「のぞむ」の用例と同じく、自分自身が「将来そのようになっていくことを期待する」役割や役割であると考えられよう。

(13) 秋の司召あるべき定めにて、大殿も参りたまへば、君たちも、いたはりのぞみたまふことどもありて、殿の御あたり離れたまはねば、みなひき続き出でたまひぬ。

(葵 二 39頁)

(13) は、「のぞむ」が「いたはる」と複合した用例である。「日本国語大辞典 第二版」は、「いたはりのぞむ」を立項し、「功勞を言いたてて、それに応じた昇進・褒美を望む。」とする。また、(13) は「秋の司召」即ち「除目」の時期であり、当該箇所『日本古典文学全集』「頭注」には、「自分の功勞を申し立てて、官位の昇進を望むこと。大臣等が、その申立てを聞いて任免を勘案する。」とある。ここでは、これまでの「のぞむ」と同様、葵上の父左大臣も参内なさるから、「御子息たちも昇進を望んでいらつしやる」ことがそれぞれあつて」と解釈することができる。

(14) (源氏)「とあることもかかることも、前の世の報いにこそはべるなれば、言ひもてゆけば、ただみづからのおこたりになむはべる。(略)にこりなき心にまかせ

てつれなく過ぐしはべらむも、いと憚り多く、これより大きな恥にのぞまぬさきに世をのがれなむと思うたまへ立ちぬる」など、こまやかに聞こえたまふ。

(須磨 二 158頁)

(14) は、光源氏が左大臣邸を訪れ、後見する東宮に累が及ばないよう、自ら須磨への退去を決意したと別れを惜しむ場面の一節である。ここでの「のぞむ」は、「…にのぞむ」と「に」と承接し、「これ以上ひどい辱めにあわないうちに世の中をのがれてしまおうと思ひ立つたのでございます」と解釈することができる。ここでの「に」の承接語「はぢ」は、謀反の罪などはないが、今以上の厳罰にあわないことであつて、直截的な場所や時を表すものではない。よつてここでの「のぞむ」は、「ある場面に直面すること」によつて、社会的役割を失うことと解することができると考えられる。

以上のように「源氏物語」の「のぞむ」は、「将来そのようになつていくことを期待する役職や社会的役割の実現を希望すること」と、「ある場面に直面すること」

であると考えられる。

2—5、大鏡の「のぞむ」

「大鏡」には、単独の「のぞむ」が2例、「ののしる」と複合した「のぞみののしる」が1例、計3例の用例が存する。

(15) 同じ宰相におはすれど、弟殿には人柄・世おほえの劣りたまへればにや、中納言あくきはに、我もならむ、など思ひて、わざと対面したまひて、「この度の中納言のぞみ申したまふな。ここに申しはべるべきなり」と聞こえたまひければ、「いかでか殿の御先にはまかりなりはべらむ。ましてかく仰せられむにはあるべきことならず」と申したまひければ、御心ゆきて、(略)

(太政大臣為光 恒徳公 228頁)

(16) よろづにつくろはせたまひしかど、えやませたまはで、御まじらひ絶えたまへる頃、大弐(だいに)の闕

(けち) 出でて、人々のぞみののしりしに、「唐人(からひと)の目つくるふがあるに、見せむ」と思ひて、「ころみにならばや」と申したまうければ、三条院の御時にて、またいとほしくや思し召しけむ、二言(ふたこと)となくなせたまひてしぞかし。

(道隆 276頁)

(15) は、太政大臣為光の長男、左衛門督(誠信(さねのぶ))と弟殿(齊信(ただのぶ))が同じ役職の「参議(宰相)」であったが、「中納言」に昇任することをめぐって会話する場面の一節である。弟の齊信(ただのぶ)は、後世、一条朝の四納言と賞賛されたほどの人物で、道長と親交があり、「枕草子」「紫式部日記」にも登場する。『新編日本古典文学全集』「頭注」は、「当時は狷官運動が盛んに行われ、天皇・院・中宮・有力大臣などに、つてを頼んでは時分を売り込んだ。」と指摘する。最終的には弟の齊信が中納言となるが、ここでは、「今度の中納言はお望み申されるな。私(左衛門督(誠信(さねのぶ)))」

がぜひ申し受けるつもりなのだ」と申しあげなさったので」と解釈することができる。ここでの「のぞむ」の対象は、「中納言」という官職であるが、その動機として「我もならむ、など思して」と明確な記述があることで、希望が実際の、直截的であると捉えることができる。

(16) は、隆家の目が悪くなり、治療を試みるために大宰大貳となる場面の一節である。『新編日本古典文学全集』「頭注」は、「人々がこそつて希望するのは、このポストにつけば外国の珍しい文物が入手でき、また確実に蓄財できたから。」とする。ここでは、「大宰大貳に空席ができ、人々が懸命に就任運動をなさいました。」と解釈できる。よってここでの「のぞむ」の対象は、「大宰大貳」という官職であり、その動機として(15)と同じく「こころみにならばや」と明確な記述があり、実際の、直截的であると考えられる。

(17) (略) 世次、「(略) まゐりて仕うまつらむ、ゆく末に、この御堂の草木となりにしがなとこそ思ひはべれ。されば、ものの心知りたらむ人は、のぞみてまあるべきな

り。されば、翁ら、またあらじ、一度欠かず奉りはべるはべるなり。(略)」と言へば、(略)

(道長 354頁)

(17) は、道長の法成寺造営をめぐる一節である。ここでは世次の会話文中に「のぞむ」が出現している。「どうかして、お役に立つものならば、参つてご奉仕いたしたい、その功德で、死後にはあの御堂の草木となりたいものだ、こう思うのです。ですから、ものの道理をわきまえているような人は、自分から志願しても参るべきですよ。」と解釈できる。ここでの「のぞむ」の対象は、法成寺造営に人夫を差し出すという社会的役割であると捉えることができる。

3-1、枕草子「ものぞみ」1例

三巻本「枕草子」には、動詞「のぞむ」はなく、「のぞみ」形が1例存する。

(18) きよげなる立文もたせたる男などの、誦經の物うち置きて、堂童子など呼ぶ声、山彦ひびきあひてきらしう聞ゆ。鐘の声ひびきまさりて、いづこのならんと思ふほどに、やんことなまところの名うちいひて、「御産たひらかに」など、げんげんしげに申したるなど、すずろに、いかならんなど、おぼつかなく念ぜらるかし。これは、ただなるをりのことなめり。正月などはただとさわがしき、もののぞみする人など、ひまなくまうづるを見る程に、おこなひもしやらす。

(二卷本枕草子 百二十段 175頁)

当該箇所(18)「能因本」系本文は、「正月などには、ただもの騒がしく、もののぞみなどする人の、ひまなく詣づる見るほどに、行ひもしやられらず。」(『新校本枕草子』168頁)とある。

『日本国語大辞典』は「もののぞみ」を立項し、「物事を望むこと。願い事をする事。また、その願い事。」と指摘する。『新編日本古典文学全集』「頭注」は、「も

のぞみ」について、「一説、県召(あがためし)の除目(じもく)に任官を望む人。」とする。よって(18)は、「正月などは、ただとても騒がしいばかりである。除目の人事で任官を望む人などが、ひっきりなしに参詣しているのを見ると、十分に仏様にお勤めすることもできない。」と解釈することができよう。この場合、「除目」という時節に、社会的役職である「官職」を「のぞむ」とは、「源氏物語」と共通していると考えられる。

3-2、源氏物語の「のぞみ」

『源氏物語』中の「のぞみ」形は、3例である。

(19) 大臣、こののぞみを聞きたまひて、いと華やかにうち笑ひたまひて、女御の御方に参りたまへるついでに、(内大臣)「いづら、この近江の君、こなたに」と召せば、(近江の君)「を」と、いとけざやかに聞こえて、出で来たり。(内大臣)「いと、仕へたる御けはひ、公人にて、

げにいかにあひたらむ。尚侍のことは、などかおのれに
とくはものせざりし」と、いとまめやかにてのたまへば、

(略)

(行幸 三 314頁)

(19) は、内大臣が近江の君をからかい戯れる場面の一
節である。ここでの「のぞみ」は、『日本古典文学全集』
「頭注」に、「近江の君が尚侍を望んでいること」とある
ように、(4)、(5)の「のぞむ」の対象と同じく、大
江の君が内侍という官職を希望していることを表してい
る。

(20) (源氏)「はかばかしき方ののぞみはさるものにて、
年の内ゆきかはる時々の花紅葉、空のけしきにつけて
も、心のゆくこともしはべりにしかな。春の花の林、秋
の野の盛りを、とりどりに人あらそひはべりける、その
ころのげにと心寄るばかりあらはなる定めこそはべらざ
なれ。(略)」と聞こえたまふに、(略)

(薄雲 一一 451頁)

(20) は、春秋優劣論に、斎宮の女御が秋を良しとする、
所謂後世「秋好中宮」と称される場面の一節である。当
該箇所「のぞみ」は、「光源氏」の会話文中に出現す
るが、ここでは「実際の願いは、それはそれとしまして、
一年のうちに移り変わる四季折々の花や紅葉、あるいは
空の風情につけても、気の晴れることもしたいものです
ね。」と解釈することができる。『日本古典文学全集』「頭
注」には、「はかばかしき方」は、上記の家門繁栄の願
望。」とあり、これまでの、「将来そのようになっていく
ことを期待する役職や社会的役割の実現を希望する」意
と考えられる。また後統部に「心のゆくこともしはべり
にしかな」と希望表現「にしかな」が表出しており、(実
際的で、実生活と直接関係する)「のぞみ」と、情趣あ
り「ふさいでいた気持が晴れて、満足する。念願を達し
て心が晴れ晴れする。」意の「心のゆく」ことが実現し
てほしい「にしかな」が、希望表現として対になつてい
ると考えられる。

(21) またこの国のことに沈みはべりて、老の波にさらにたち返らじと思ひとちめて、この浦に年ごろはべりしほど、わが君を頼むことに思ひきこえはべりしかばなむ、心ひとつに多くの願(ぐわん)を立てはべりし。その返り申し、たひらかに、思ひのごと時に逢ひたまふ。若君、国の母となりたまひて、ねがひ満ちたまはん世に、住吉の御社をはじめ、はたし申したまへ。さらに何ごとをか疑ひはべらむ。このひとつの思ひ、近き世にかなひはべりぬれば、遙かに西の方、十萬億の国隔てたる九品の上のぞみ疑ひなくなりはべりぬれば、今は、ただ、迎ふる蓮を待ちはべるほど、その夕まで、水草清き山の末にて勤めはべらむとてなまかり入りぬる。

ひかり出でん暁ちかくなりにけり

今ぞ見し世のゆめがたりする

とて、月日書きたり。

(若菜上 四 107頁)

(21) は消息中の「書き言葉」としての用例で、明石の入道が若君誕生のことを伝え聞き、入山した後、最後の

消息を都に送る場面の一節である。ここでの「のぞみ」は、まず「願を立て」、自力では実現・成就がむずかしいため、他力を期待している、こうなつてほしいという場面である。助辞による希望表現の「詠嘆的希望表現」と極めて近似の性格を有していると捉えることができる。「ねがひ」が先行した後で、「のぞみ」が出現するのであるが、ここでは、「極楽に往生する望みは疑う余地もなくなり、ましたゆえ」と解釈することができると考えられるが、直接「役職や社会的役割の実現」を希望するというよりも、仏門にはいった「入道」として、「将来そのような思っていくことを期待する」と捉えることができるように思われる。

4、おわりに

以上、中古和文に表れた「のぞむ」「のぞみ」の意味用法を考察した。その結果、次のようなことが明らかとなった。

動詞「のぞむ」の対象は、「将来そのようになっていくことを期待する「役職」や「社会的役割」であり、それらを実現してほしいと希望することである。また、「のぞむ」は、実際の、実生活と直接関係する。このことは、動詞「ねがふ」が、「自力では実現・成就がむずかしいため、他力を期待している、こうなつてほしいという考え」であり、助辞による希望表現の「詠嘆的希望表現」と極めて近似的性格を有していると捉えることができることとは性格を異にすると考えられる。

また、「のぞむ」には、「ある場面に直面すること」という意があるが、それは、「ある場面に直面すること」によって「社会的役割」を失うという用例であり、「社会的役割」を対象にしているという点で希望表現形式と共通していると考えられる。

さらに、「のぞむ」は、副詞句化した「のぞむらく」の用例は、明治期に入るまで見られず、その点動詞「ねがふ」が、「ねがはくは」のように、副詞句化することと相違する。

今後もさらに希望表現形式の史的変遷過程を明らかにして行こうと思う。御教授賜れば幸いである。

〔尚、本文は、「源氏物語」は「日本古典文学全集」、〔大鏡〕は「新編日本古典文学全集」その他は「日本古典文学大系」を使用し、〔新日本古典文学大系〕や各種注釈書、索引等を適宜参照した。また、本稿は科研「28K00633 基盤研究(C)日本語表現史的観点からみた北部九州方言に関する研究」の研究成果の一部である。〕

〔参考文献〕

- ・大野晋編(2011)『古典基礎語辞典』
- ・築島裕(1983)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(東京大学出版会)
- ・宮島達夫他(2014)『日本古典対照分類語彙表』(笠間書院)
- ・森田良幸(1989)『基礎日本語辞典』(角川書店)
- ・森脇茂秀(1994)『希望表現の一形式―助辞「もが」』

「てしか」形を中心に―「山口国文」17

・森脇茂秀(1999)「終助辞「かし」をめぐって―中世

後期を中心に―」
「山口国文」22

・森脇茂秀(2000)「希望の助辞「もがな」「がな」をめぐって(一)」
「別府大学国語国文学」42

・森脇茂秀(2001)「希望の助辞「もがな」「がな」をめぐって(二)」
「山口国文」24

・森脇茂秀(2017)「希望表現「ねがふ」小考」
「別府大

学国語国文学」59

学国語国文学」59